



R元11. 29撮影

【巻頭言】

学校は、復興の最大の拠点

～地域における学校の存在意義を問い直す～

福島県二本松市教育委員会教育長 丹野 学

東日本大震災から、もうすぐ9年目の春を迎えます。震災当時の各学校では、今までに経験したことの無い様々な課題が次々と押し寄せ、それぞれの課題に直面しながらも、学校のいち早い機能回復に向けて、教職員で心を一つにしなが、なかなか見通しが持てない「先」に向かって歩み続けていました。

3月11日の東日本大震災に伴う原子力発電所の事故は、本県に、二重の災害となって押し寄せ、9年経とうとする現在でも、復興の大きな妨げとなっています。このような状況下にあっても、震災当時から一貫して取り組んできたことは、でき得る限り良質な教育活動を行うことを追い求めてきたことに尽きます。「ふくしま」の復興には、最短でも40年以上の長い年月がかかると言われてしています。私たちは、震災以前の「ふくしま」よりも更に他都道府県や世界に誇ることが出来る、「福島」の復興を目指してきました。だから、「学校は、復興の最大の拠点」でなければならないのです。

当時、県校長会の役員をしていた関係で、度々上京し、文部科学省の審議官や局長、他の都道府県の校長会長と話す機会が、数多くありました。その中で、既に近年大地震の災害に遭っていた新潟県の校長会長と話をした時、「地域の方々から、学校の存在を感謝された」と伺い、改めて学校の存在意義について考えさせられました。確かに、東日本大震災でも、多くの学校がすぐに避難所となり、地域住民を受け入れました。受け入れた職員は、ほとんどの学校が教職員でした。当時を振り返ってみても、学校の教職員しか対応できる職員がいなかったことも事実でした。

福島駅のすぐ近くの学校に勤務していた私は、午後6時過ぎには、福島駅に足止めされていた避難者を含め1500名以上の他の都道府県の方々と思われる避難者を受け入れました。寒く、時折小雨が降り続く中、徐々に避難者の不満が募り、ついには、当時校長であった私を取り囲まれ、罵声を発せられる事態に達してしまいました。近くにテレビ局があったためか、その様子を全国放送していました。今でも、その時の様子が脳裏をかすめ、悔しかった当時を思い出します。

「おまえたちは、公務員だろう。こんな時に役に立たないでどうするんだ」「この寒さを、何とかしろ」「早く夕食を出せ」などの罵声は、今でも忘れることはできません。しかしながら、その時に身体で学んだことがありました。教育公務員も、当然のことながら「公務員」であったということを…。千年に一度の大災害において、避難者にとっては、学校は、唯一のセーフティエリアだったのです。

私たちは、東日本大震災をとおして、「絶対」という言葉は通用しないのだということをつくづく思い知りました。そして、過酷な状況においては、自ら、精度の高い必要とする情報を入手できなければ、対応が後手後手に回るということも痛感いたしました。ありとあらゆる情報が途絶えてしまう中でも、目の前の子どもたちを守り、育て続けることが、私たちに課せられた使命のひとつだったのです。不平不満を口に出しても、何ら改善の糸口にもならないことを自分自身の身体全体で感じ取った瞬間でした。

今、各学校では、子どもたちの笑顔があふれています。これからも、目の前の子どもたち一人ひとりの幸福を願い、教職員心を一つにして質の高い教育活動の実現に向けて努力し続けてまいりましょう。「学校は復興の最大の拠点」を合い言葉に、地域の方々と協働し合いながらふるさと「ふくしま」の再生の一翼を担い、明日の子らの幸いを夢見て…。

【小教研関係全般】

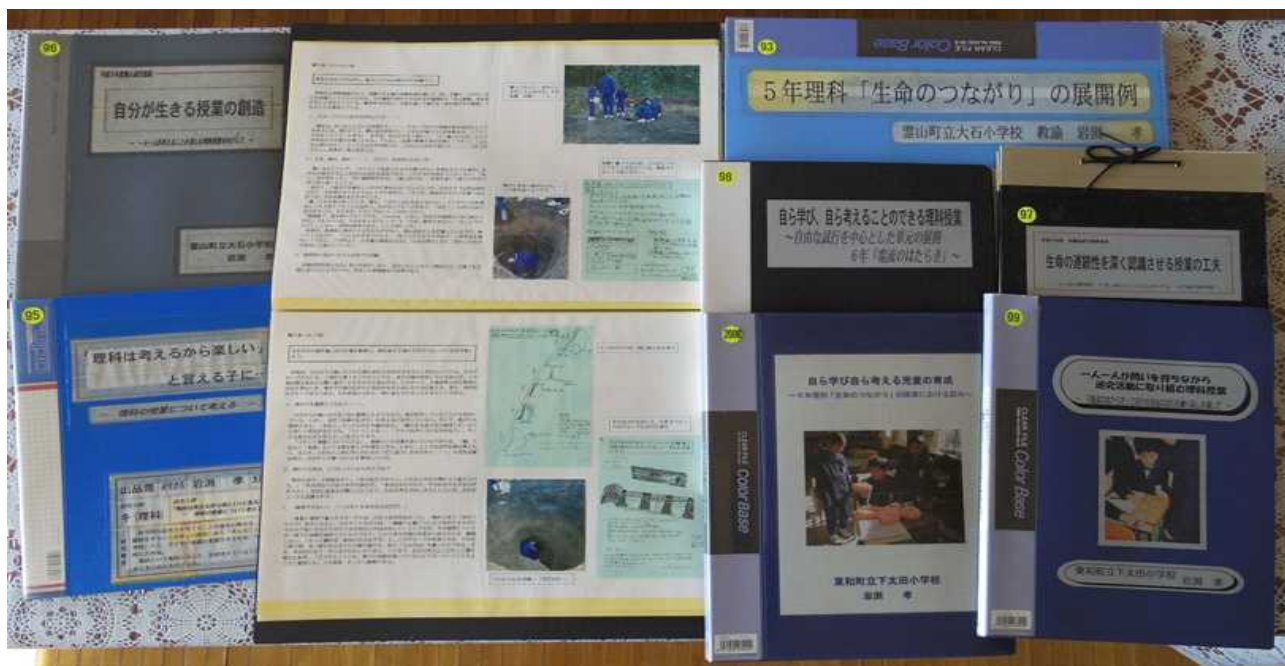
小教研最大の宝、それは部員同士のネットワーク

福島県小学校教育研究会安達地区会長 岩淵 孝
(二本松市立杉田小学校長)

寄稿依頼を受け、過去にまとめた個人研究物を引っ張り出してみた。手元に残っているのは1993年33歳（伊達地区）から2000年40歳（安達地区）までの8年分である。初期はB5・B4判であることに時代を感じる。テーマの「考えることが楽しい…」「学習に意欲的に…」「自分が生きる授業」「深く認識させる…」「自ら学び自ら考える…」「一人一人が問いを持ちながら追究…」からは、理科で求める児童の姿がまさに不易であることを再認識させられる。「生命のつながり」では全員に自分人形（自分の出生時の身長体重を再現した人形）を作らせたり、「大地のつくり」では畑に2mを超える深さの穴を掘らせたり（子どもたちが納得いくまで掘り進めた結果だが）、「電気のはたらき」ではデビューしたばかりの初代プリウスをレンタルして全員を乗せて校庭を走ったり…、拙いながらも型にはまらぬ工夫と勢いが懐かしい。生き生きと目を輝かせていた児童の顔が浮かぶ。各自の実践を競い合い、授業を提供し合い、時には（いつも？）厳しく批判し合う小教研理科部の仲間の顔が浮かぶ。無謀な実践を温かく（冷や冷やだったかもしれないが）見守ってくれた管理職がいたことも感謝に堪えない。本当に楽しかった。

さて、今の小教研はどうだろうか？魅力ある組織になっているだろうか？同じ教科をベースに教師が学び合える環境になっているだろうか？各研究部長や本部役員の校長先生方もその危惧からか、特に今年度は後期研究協議会に研究授業を計画したり、外部講師を招聘したり、可能な限り教頭を参加させたり、ホームページを活用して事務的な負担を軽減したり…と様々な工夫をされている。その知見と行動力に心から感謝するとともに、会長としてより一層の改善に努めたい。

小教研最大の宝は部員同士（校長も含めて）のネットワークだと思う。それを最大の武器にしながら安達地区小教研が輝きを増幅し、ますます充実・発展していくことを願っている。



【特集テーマ】

「感覚的なこと」から「事実」へ

二本松市立塩沢小学校

伊藤比呂美

数年前、好奇心からスマートバンドを購入し、使ってみたことがある。心拍数や眠りの深さ、活動情報（歩数や運転したり眠ったりした時間）がスマホのアプリで表示される。一番興味深かったのは、ストレスレベルの表示である。生活時刻を横軸に、ストレスの強さが棒グラフで示される。毎日、ほぼ同じ時間帯にストレスが強くなる傾向に気付いた時は、自覚のないストレスに驚いた。

先日、「授業中に机間指導の対象となる児童の傾向とその傾向の学級規模による違い」について研究されている方の話を聞いた。実験授業では、対象児童全員に名札型のデバイスを着用させ、身体の揺れを即自的・計時的に計測した。即自的とは、机間指導が実施された時点の直前 10 秒間のことである。この実験結果から、30 人程度以上の学級規模の場合、動きが小さく目立たないと考えられる児童は、机間指導を受けにくくなることが示唆されたという。長年の教員経験からすれば、当然のように思えることだが、データで示されると、「感覚的なこと」から「事実」に近づいてくる。この研究をされている方は、今後、授業中の教師にデバイスを着用させれば、心拍数などを計測して、どの場面で教師の緊張が高まるのか、その傾向を調べることができるとも話していた。学校現場では、マネジメントの必要性を感じつつも伝統的な授業研究から脱却できずに苦勞しているが、研究機関ではデバイスを活用してデータをもとに授業を分析する時代になっているのである。

机間指導は、教師が児童生徒の様子を観察して「非計画的」に行うフィードバックの一つである。

「非計画的」だからこそ、教師の力量が瞬時に問われてしまう。教師の力量を高めるために、見えにくいことを可視化して、感覚的なものではなく、事実として自覚できるようにしていきたいと思っている。

【特集テーマ】

笑顔咲く地域の担い手を共に

二本松市立小浜小学校

佐藤 敏宏

10 月の台風 19 号による記録的な豪雨により、本校がある小浜地区も河川の氾濫や土砂崩れ、長期間の断水など大きな被害を受けました。そのような中、子ども達は、保護者や地域の方々をはじめ多くの方々の支えをいただきながら、元気に学校生活を送ることができました。

学習発表会前の出来事でしたので、予定通りに実施するか悩みました。しかし、今年の学習発表会のテーマは「笑顔咲く！みんなが主役 小浜っ子！」でしたので、子ども達と共に、地域に笑顔を届けるために、予定通りの実施を決めました。結果として実施予定日の前日の大雨により、順延しての実施となりましたが、まだ断水中の家庭もある中、たくさんの保護者やご来賓の方々会場に足を運んでくださいました。子ども達の元気いっぱいの笑顔に、会場にもたくさんの笑顔が咲きました。子ども達の心の中にも、地域に笑顔を咲かせようという気持ちが自然と育まれていたように感じました。

さて、本校区では昨年度から、幼保小中、保護者、子ども達と関わりのある地域の方々が一堂に会して、お茶を飲みながら、子ども達の未来などについて語り合う機会を持っています。昨年度の参加者の共通の思いの一つは、子ども達には当たり前前（あきり）のことが当たり前（あきり）にできるようになってほしいということでした。

今年度も、11 月にこの会を実施する予定です。今回は、子ども達の未来のために私たちができることをテーマに語り合います。短い時間ですが、保護者も地域も教員も同じ思いを持つことで、将来の地域の担い手となる子ども達の未来と一緒に創造して行きたいと考えています。



【趣味・随想】

日々、英会話の勉強に努めています！

二本松市立岳下小学校 佐藤 聡

二本松市内の中学生 10 名とともに、8 日間の日程で米国に行かせていただいたことがあります。2 つの教育委員会での勤務で ALT の担当を経験済みでしたが、海外旅行は初めてでした。

朝河貫一博士の墓参、ダートマス大学やイエール大学の訪問、ハノーバー町やニューヨークの数々の有名スポットの観光等々、夢のような時間でした。

想定外の出来事はニューヨーク最終日に起こりました。なんと、寝坊した中学生 2 人を住所だけを頼りに、市内の朝食会場へ後から連れて行く任務を任せられたときのことです。家族旅行でも一人だけ迷うほどの方向音痴にとっては、究極の課題でした。

以前、日本の介護についての番組がありました。介護施設では、外国人スタッフの雇用が増えているのだそうです。払える介護料により施設が決まるでしょうし、介護スタッフも日本人だけとは限らず、外国人（日本語を話せる・話せない）かもしれません。

「日本語を話せない外国人にお世話になるかもしれない」と考えると、残された道は英会話の勉強に励むしかありません。通勤中は耳で覚え、自宅では目で覚えます。（暗記力の低下をアルコールの力で補おうと、飲酒しながら暗記にトライしたことがありますが、忘れることの方が多く逆効果でした。恐るべし、アルコール力！！）



しかし、最近、自分が将来抱えるであろう大きな問題に気付きました。「もし、認知症にでもなったら、何語を覚えているのだろうか。日本語？、それとも、片言の英語？」と・・・避けては通れない厳しい現実です。

【新 会 員】

信頼される学校づくりを。。

本宮市立本宮小学校 佐藤 健夫

3 年ぶりに安達地区にもどって参りました。西の安達太良山と東に流れる阿武隈川に見守られているような安心感が不思議と湧いてきます。本宮市には 9 年ぶりの勤務となります。懐かしと思うと同時に、当時と変わったことに新鮮味も感じる不思議な感覚です。

毎朝の登校指導で子どもたちの明るい笑顔と可愛らしい挨拶から元気をもらい、「今日も頑張るぞ」と奮起。各教室を回っては朝の活動を見て、その仕草にも心が和みます。校長室の前を通る子どもたちは、ガラス窓越しに私に手を振りながら通り、廊下をすれ違うときはお互いにハイタッチをします。この様ななんとも愛らしい 362 名の子どもたちに囲まれ、また指導熱心な先生方にも恵まれて本宮小学校の学校経営に携わることができ、嬉しい限りです。

そんな素晴らしい環境の中でもふと思うのは、この笑顔の陰にも家庭という場所に代わる、あるいはその一部でも担うことのできる子どもたちの「居場所」づくりが求められているということです。それが学校であったり、地域社会であったり、あるいは行政主導の居場所づくりであったりということです。子どもは、家庭で生まれ、学校で学び、地域で生きる、と言われます。学校、家庭、そして地域社会のつながりを大切に、子どもたちが生活時間の大部分を占める学校生活で、「毎日学校へ行くのが楽しい。」そんな存在の当たり前の学校、家庭と地域から頼もしいとされる学校づくりに取り組んでいきたいと思います。

どうぞよろしく申し上げます。



【新任校長として】

「功在不舍」(功は^{こう}舍めざるにあり)

二本松市立原瀬小学校

大越吾都臣

この言葉は、原瀬小学校の校長室に掲げられた書額にあります。為書きの署名から本校の 100 周年記念行事の際に掲げられたと推測できます。

中国の思想家「荀子」の言葉で、調べてみると、「**努力をコツコツと重ね、あきらめなければ最後には物事は立派に成就する。**」といった意味になるようです。不思議と強く引きつけられる言葉です。

100 周年は今から 46 年前。当時の小学生は、現在ちょうど私と同じ年代の方々ということになります。この言葉に強く印象づけられたのは、そのような因縁からなのでしょうか。

因縁・・・と言えば、郡山市出身の私が、35 年前に講師として初めて教壇に立ったのは現二本松市。30 年前に新採用教員としての第一歩を踏み出したのも二本松市。そして今こうして新任校長として二本松市にいられることに強い因縁を感じずにはられません。

「因縁」というと「腐れ縁」のように受け取られがちですが、仏教では「物事が生じる直接の力である因と、それを助ける間接の条件である縁。すべての物事はこの二つの働きによって起こると説く。」とありました。

教師として人生の道が始まり、語り尽くせない人々に支えられ、今こうして校長という立場でここにいられることに感謝すると共に、今度は自分自身がその恩を返していかなければならないと感じております。そういう思いが「因縁」の意味と合致しているように思えました。そして、その姿を「功在不舍」の文字が頭上で、厳しく見守りながら励ましてくれているように思います。

思いを行動にし、諦めることなく精進して参りたいと思います。皆様からのご助言、ご指導賜れば幸いに存じます。



安達太良山を背景に全校児童で記念撮影

よろしく願いいたします。

【新任校長として】

「日山」とともに

二本松市立旭小学校

石澤 悟

旭・岩代・二本松・安達・県北、私にとって全てが初めてのこの地に着任して、早いもので半年が過ぎました。

本校では、生活科及び総合的な学習の時間の探求活動を通して、「主体的・協同的な問題解決を積み上げ、地域への愛着を抱く子どもの育成」を現職教育のテーマとして取り組んでいます。

子どもたちは、「日山」の裾野に広がる旭地区の各所に出向いて、「ひと」と触れ合い、「もの」を見出し、「こと」を知り考える活動を生き生きと行っています。全校児童で行う田植



え体験では、泥だらけになりながらも学年を超えて協力して活動しました。日山活動では、地元のお年

寄りとパークゴルフを通して触れ合ったり、地元の食材を使って自分たちで調理したカレーを頬張ったり、森の案内人の説明に耳を傾けたりして、ふるさとへの想いを深めました。

これからも、保護者や地域の皆様のご協力を頂きながら、すばらしい先生方と共に、地域を理解し、地域を愛し、地域のためにできることを考え、行動できる子どもたちを育てるために力を尽くしていきたいと考えています。

最後になりましたが、校長会の諸先生方には、日ごろより様々のご助言をいただき大変感謝申し上げます。今後とも、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



【新任校長として】

安達太良山を望みながら

大玉村立玉井小学校

小林 雄

安達太良山に見守られ、ほんとの空に包まれ、美しい田園に囲まれたこの大玉村立玉井小学校で 292 名の元気な子どもたちと教育熱心な教職員と共に学校生活を送っております。

本村の教育の特色は、一つ目に村内 2 幼稚園・2 小学校・1 中学校を「おおたま学園」として、子どもの育ちや学びを分断することなく一貫した体制で支援する「縦の広がり」。二つ目は、コミュニティ・スクールや学校支援地域本部を核として保護者や地域住民による地域ぐるみの体制で支援する「横の広がり」。そして、三つ目は、学校教育と社会教育の融合「学びの還元と循環」です。



おおたま・オータム・フェスタ「大名倉山登山」

このおおたま学園コミュニティ・スクールでは、学校運営協議会の委員を兼務し、地域のそれぞれの立場から選出されたコミュニティ・スクール委員の方々から、学校課題に対し、熱い意見をいただいております。理念を共有し、それに基づく教育を実践していくことの意義や必要性、そして、地域一体になった教育の素晴らしさや難しさを実感しております。

地域のたくさんの方々に本校の子どもたちは見守られ、包まれ、囲まれ、まさしく『学校で「地域」と出会う』日々です。

新任校長として、空回りしたり、悩んだりの連続ですが、そんな時はいつも、『子ども』を主語にして考えているかと自問自答しております。

そして、雄大な安達太良山を望みながら、決して人のせいにならず、ゆっくりでいいから、毎日を一つずつ、自分の足で踏みしめながら、歩んでいける子どもたちを教職員や保護者、地域の方々と共に育てていきたいと考えています。

【新任校長として】

「チーム白岩」を合い言葉に

本宮市立白岩小学校

鈴木 茂

白岩小学校に着任して 8 か月。この間、運動会、学校公開（学習発表会）、放射線教育実践協力校公開授業などをはじめ、学校の教育活動が順調に進み、その度に、子どもたちの頑張る姿を見ることができています。そして、いつも子どもたちの頑張りを引き出してくれているのが、19 名の教職員です。

第 1 回職員会議で、教育目標の具現化のために、「チーム白岩」の精神を確認しました。その思いを 19 名の先生方は常に心に留め、



放射線教育実践協力校公開授業

協力し合っています。先生方が助け合って目の前の課題を解決していく姿を目の当たりにすると、校長一人では何もできないけれど、チームとして英知を結集すれば、課題を解決していけることを実感しました。

さらに、学校運営を下支えしているのが、地域や保護者の存在です。PTA による美化活動、地域一体となった資源回収、学習支援のボランティア、登下校の見守りなど、教職員だけではできないことを可能にしています。地域や保護者の理解と協力がなしに学校経営が成立しないことも、改めて感じました。

社会に開かれた教育課程の実現が叫ばれていますが、その基礎が築かれている白岩小学校に赴任できたことを誇りに思います。これからも、教職員、地域・保護者が連携して「チーム白岩」の下、さらによりよい学校を目指して頑張っていきたいと思っております。

そのためには、安達地区小学校校長会の皆様のご指導やご助言をいただきたいので、これからもどうぞよろしくお願いいたします。